擬似体験の世界

中村博保

中村光夫は「大人と子供」というエッセイのなかで、「童心」という神話は、大人が勝手に作ったもので、実際の子供は「童心」等とは関係ないリアリストであると書いている。子供にとって迷惑なこんな言葉を大人が発明したのは、つまり、大人自身のなかに虚像としての子供を必要とする理由があったからに外ならない。大人は屢々、自分の夢を子供に押しつけるために、いわゆる「夢」のある玩具を買ってやる。当の子供達は、成程その当座こそ喜びもするが、通常すぐに飽きてしまうことになる。子供にとって本当に大切な玩具とは、電車に見立てられた木切れであったり、すり切れた人形であったりするわけで、子供には子供の世界があって、その限りでは極めて真面目な人生の勉強がそこですでに始められているのである。子供の遊び、何々ゴッコと称する遊びは、決して大人の考えるような真似事ではなく、真剣な、一種の擬似的行為であると考えていいだろう。子供はこの擬似行為によって、現実の「経験」自体、「経験」の経験の仕方自体を予め学習するわけである。運転手ゴッコをしたからといって、大人になってから運転手になるとは限らないし、先生ゴッコをしたからといって教師になるとは限らない。しかし女の子は、なぜ必ずお嫁さんゴッコをするのだろうか。そこでは運転手やお嫁さんの、少くともリアリティだけは経験されているのであって、このような予備体験、イメージにおける経験が、その後の人生にとって欠かせない基礎になっていることは否定できない。電車の形をした木切れや、すり切れた人形は、遊びの世界では充分にリアリティをもっているのであって、そこで経験されるリアリティが、自由に外化され得る対象こそが子供にとっての本来の玩具なのである。つまり、遊びで経験されるリアリティが外化（対象化）された玩具は、擬似体験にリアリティを与えるための、欠かすことのできない支えとなっているわけである。子供は遊びの世界の中で、人生を予め勉強するばかりでなく、充されない欲求をイマジネーションによって補っており、この補償によって、子供の世界は世界として完結している。私の隣の子は、月光仮面の真似をして二階から飛翔し、そのために足の骨を折ったが、こうした幻想体験が、現実の世界にまではみ出した例を、フローベルは大人の世界で描いている。それが「マダム・ボヴァリー」であったことは今更いうまでもない。最初に、「童心」等という神話は大人のミニチャ愛好の精神が作り出した嘘八だということを書いたが、そもそ

も「小説」の世界とは、つまりまた、子供の精神構造をモデルとし、その類似においてしか成り立たない世界であるらしい。近代において、「小説」の主要な機能が、「いかに生くべきか」という人生勉強に求められてきた事実、あるいは、充されざる現実をイメージにおいて充すために読まれてきたことを考えるならば現実の補償という読み方がまた、子供の遊びにおける想像力の機能を原型としていることは否定できないだろう。ただ大人は、自分が行う擬似体験を、言葉の世界におけるそれとして、現実のリアリティから区別しており、その保証の上にたって、感情移入（真らしさによる「真」なるものの自己提示＝スタンダール）を行っている。成程、子供は遊びの中に王子様とお姫さま（現在では恐らくそのヴァリエーションとしてのウルトラマンや魔法使いサリーチャン？）といった物語的（ロマネスク）なものを導入し、それによって大人と違った想像力（イマジネーション）の世界を完結させている。しかしそれは、実際には大人が与えたおはなしであると考えていい。実際の子供達には、そんな空想力はない。つまりロマネスクなもの（物語的なもの）とは、大人が現実との対置において創り出すものであって、そこまで想像力が発達すれば、子供はすでに子供ではなくなったということになるわけである。つまり、この「物語的なもの」こそ、大人が子供に与えるオモチャなのであって、大人は、それをよろこぶ子供達を「童心」という言葉で確認するとともに、更にそれをモデルとして「小説」世界を成り立たせていることになる。ここでこんな話を持ち出すのは適当かどうかは分らないが、ある未開人の種族では、女房がお産をする時に、亭主も一緒に苦しむそうだ。その時、亭主は本当に腹が痛むらしい。子供も未開人も、自己暗示によるリアリティの提示を、そのまま「真」として経験することができる意味においては共通しているらしい。未開人の世界では、このことは更に、イメージにおいて予め体験したことはそのまま現実においても起るという信念（呪術）にまでつながることになるのだが、このような呪術性が、子供の世界ばかりでなく、小説の世界にまでも及んでいることを見逃してはならないだろう。恐らく近代以前の小説においては、近代人の読み方と違った読み方、つまり生命の自己強化（バイタリスティック）的な読み方（ロマネスクなものの自己提示）があったと考えられるのだが近代小説においても、現実から切り離されて、「小説」が自律的にリアリティをもつことができるのは、作者の念じたものが読者の心の中で実現されたことを意味するとも考えることができるのであって、小説の原「構造」は、考えてみると、かなり旧い人間の構造を引きずっていることになる。もちろん、小説の読み方、したがって書き方は、人生の予備経験としての読み方や、現実の補償としての読み方に限られているわけではない。第三の読み方とは、つまり勉強や心の支としてではなく、純粋に楽しみのために読む読み方である。しかし、小説の叙述がつくり出す幻像を、ただそれだけのものとして楽しむためには、余程の精神の強さと知性の高さが要求されているのである。